

# 鯖釣漁業試験及び漁業調査

山下知昭、岩倉 栄、佐原耕治

(概要)

昨年に行つた済州島近海を調査すべく2航海実施したが、李ラインよりの締出しにより好漁場での操業は全く出来ず、拿捕事件の惹起により一般船と共に中止した。

済州島漁場の衰失に伴い昨年頃から急激に増加した、鯖釣漁船の動静は今後この漁場に変る新漁場の開拓如何にかゝるものと見られていたが、多月から約1ヶ月の空白期間を作つただけで、東支那海に於いて鯖漁の再開を見るに到つた。

当指導所ではこの海域を調査するには指導船の性能不備により不可能なため、鹿児島水産指導所、南海区水産研究所、鹿児島駐在員の協力を求め入港船の漁況よりこの海域の調査をし、漁況放送で沖合船へ好漁位置を放送すると共に各月毎に漁況を取纏めた。

期間

又1次 昭和28年7月9日 ～ 7月15日  
又2次 " 8月3日 ～ 8月12日

使用船

指導船 ちどり丸 (19.57噸 50馬力、103型魚群探知機、無線電信機)

集魚灯

24V 100W 8ヶ～12ヶ

餌料

又1次 きびなご 188kg  
又2次 小羽いわし 175kg

砕氷

又1、2次共 10kg

乗組員

調査員 1名 船員 9名



	撒餌種類	キビナゴ	キビナゴ	キビナゴ	キビナゴ	小羽イワシ	小羽イワシ	小羽イワシ
魚種別漁獲	ゴマサバ	273尾	225尾	675尾	495尾	77.5%	56%	99%
	ヒラサバ	27尾	25尾	75尾	55尾	13.5%	14%	11%
	アジ	—	—	—	10尾	—	—	—
サバ組成	ゴマサバ	91%	90%	90%	90%	85%	80%	90%
	ヒラサバ	9%	10%	10%	10%	15%	20%	10%
	アジ	—	—	—	—	—	—	—

記 事

又 / 次 7月9日 13時30分 串不野出港

7月10日 07時10分 大瀬崎通過 水温は五島灘で25℃台 澁州断 — 大瀬崎間で最高 25.9℃  
26℃の水帯はみられず

20時00分 澁州断半島ESE30哩附近着流す。水温 21.4℃ 他船凡そ100隻 魚群容易に浮上せず。他船も漁勞しにくい模様。24時頃より餌付きやよくなり朝迄300尾を釣る。

11日 前夜漁場は水温低く海水も汚濁しているため更に東方に航し、半島E45哩附近で操業す。水温0mと25m、70mの較差大である。他船凡そ30隻、21時、小群浮上せるも餌付き悪く直ぐ沈下す。頻りに漁場を変えるも大群に遭遇せず。250尾のみ。

12日 前夜漁場を断念、西に航し半島E30哩附近にて操業す。漁況は依然として不振 潮流速く漁良き船は多く、さば操業船密集し、然も広範囲に及んでいるため、魚群は一様に広く分布せるためと思われる。夜明け小群浮上しやよ活発な餌付きをみる。漁獲 750尾。

13日 前夜漁場より更に西へ航す。天候好転し、操業容易にして巾着船も数艘みらる。23時頃 魚群灯につくも餌付き悪、03時頃餌付きやよ活発となるも撒餌うき04時20分操業中止し帰途につく。漁獲物中大アジもみられ 計 550尾

15日 10時15分 串不野帰港

マ、2次

8月3日 16時 串木野出港

4日 08時15分大瀬崎通過 夫便次々に険悪となりSEの風波強くター5 ウネリ5となるも他船と共にNW/Wにて更に進行す。

大瀬崎より9時間航走せるも風波強まるための操業困難と思われ、転針、荒川港遡泊に向う。

5日 03時15分荒川港投錨。

5日〜7日 時化、荒川、玉ノ浦遡泊

8日 05時45分投錨。 濟州島へ向う。 水温依然として高温を示し、降雨少いため沿岸水帯の勢力弱いのか、遅はれた。 17時30分漁場濟州島E 1/2 S 40 附近に到達。 附近に鰯釣漁船80余隻 巾着船15、6隻を数え 20時10分操業開始。 魚群可成りある模様なるも表面に浮上せず20時30分から22時50分まで02~00から04~00までの2回のみ散発的に餌付があっただけで魚体も不揃で200尾位のものが非常に多かった。

9日、 18時よりSSWに2時間航走20時操業開始するも餌付なくこの間漁場を4時間近く廻るも他船も漁なき模様であった。

これは汐流が余りに急速であったためと思われ01~30より04~30まで閑散ではあつたか餌付あり。 01~30より鰯の標識放流試験を調査員及び船員1名の計2名で50尾を放流した。

本日の魚体は平均に大型でホンサバ、コマサバの組成は2:8位と思料された。 04~00強い驟雨と突風性の強風により操業が危ぶまれたので一旦五所に向け05~00航走した。

10日 10時30分風波止いだため操業可能と判断 再び漁場に向う。 19~30操業開始せる処21~15より23~00まで稍々活発に餌付あり、ホンサバ10% コマサバ90%の割合で600尾近く釣上ぐ。 23時以後、殆んど餌付なく、11日 03~25撤錨便り果し帰途につく

12日 04時45分 串木野帰港

◎ 考 察

マ1次航路は25°Cの等温線の北端は大体33°N 128°E附近を通り五島福江島に達し、更に五所灘南側を通り天草南方に達しているもののやうである。

一方清州筋E30湍附近では22~23°Cを示し、水温分布は複雑の様で水色も悪く一部冷水の浅層が見られていた。7月10日より15日頃にかけて此の方面で操業した船は潮流もE-NEで可成り速く何れも濃悪く、一部の船を除き1晩に200~400メの漁しかみていないようであった。

魚群は此の水帯よりもむしろ更に東方の高温水域に未遊していたのかも知れないが、出漁船なく此の方面の魚群については不明である。

何れにしても大雨の影響がなくなり日照が絶けば漁況は好転するものではないかと考えられる。又2次は長期に渉る日照のため高温、高鹹となっているものと思はれ対馬緩流が五嶺近海に接近し又大陸沿岸水帯も衰弱したものの如く清州筋近海も29.3°Cと平年より2°C程の高目を示している。高温と共に汐流の異常流速も多少は漁況に影響しているものと思われる。

好漁位置は漁場図に示す如く8月上旬から中旬始めにかけて串木野船によるものである。これは可成り清州筋に接近した危険区域と云はれる範囲に入っている。昔から之の海域には接岸しない以上確実な好漁は望まれないと云える。不漁時の釣餌について、天秤釣の際鹿児島地方で使用する如く三枚におろし表皮を付けたまま赤味を出来るだけ多くつけて短冊に切り鉤先を度どかくすように掛けると割合餌付は不漁期でも良いようである。

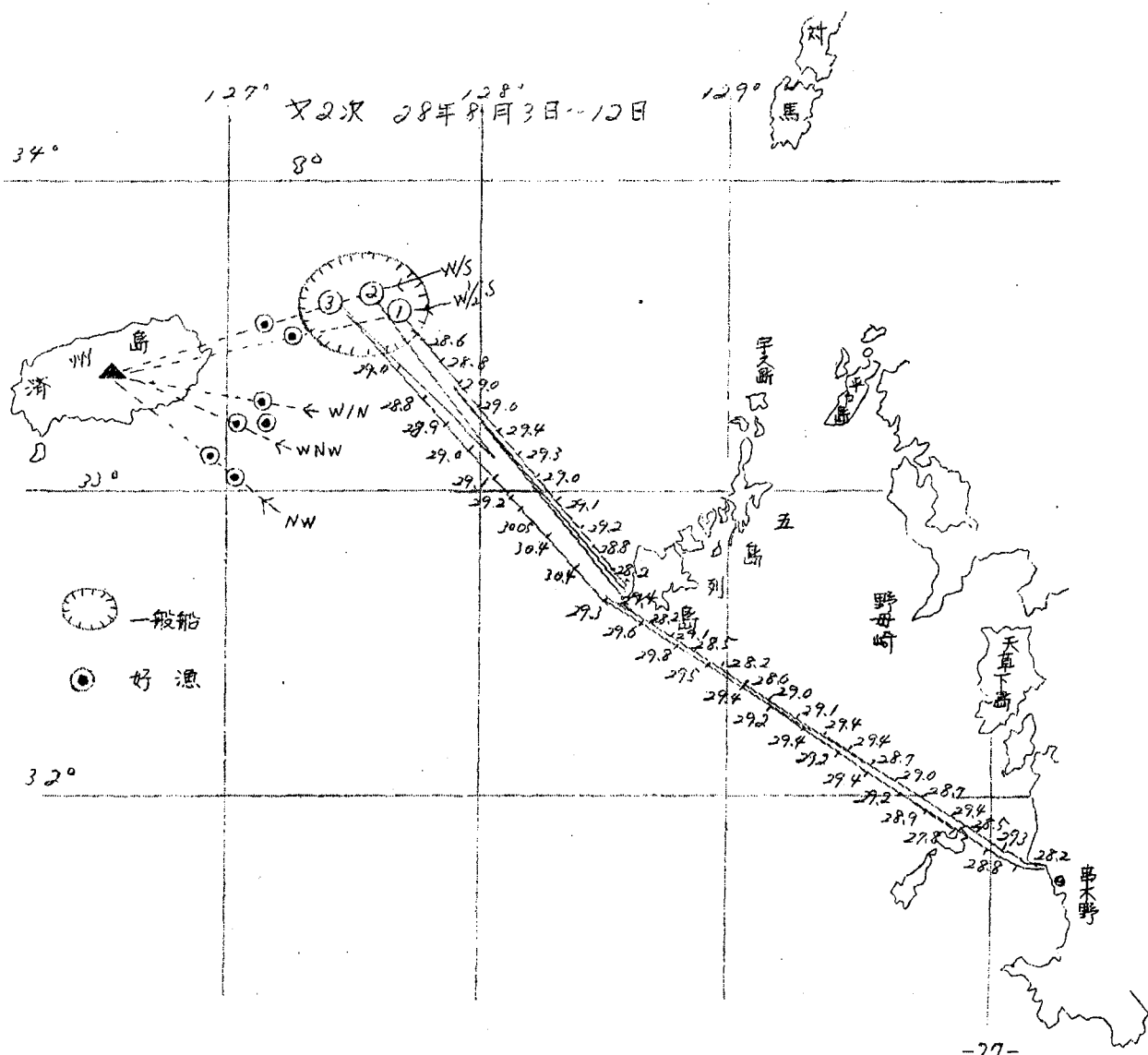
魚種はホンサバよりゴマサバの方が肉質に赤味を帯びているため適するハークの餌で平均3尾程度しか持続しない。

#### 購操識放流試験

放流漁場	清州筋 E/N 35湍附近
放流尾数	ゴマサバ 35尾    ヒラサバ 7尾    魚種不明 8尾    計 50尾
放流年月日	28年8月10日
記号及番号	金属：面A 1,701~1,750
経過	

竿にて釣上げた魚を直ちに手掌にて押え、鉤を除して鰓側内側に当て体長測定を行い尾柄部に附操放流した。従事者2名で1尾放流に30秒より2分位を要す。





標識記号番号	魚種	体長	標識記号番号	魚種	体長	標識記号番号	魚種	体長
西A 1701	ゴマサバ	36.5 <sup>cm</sup>	西A 1704	ゴマサバ	36.5 <sup>cm</sup>	西A 1707	不明	35.0 <sup>cm</sup>
" 1702	"	36.0	" 1705	"	37.5	" 1708	ゴマサバ	34.5
" 1703	"	33.5	" 1706	不明	32.0	" 1709	"	36.0
" 1710	"	36.5	" 1724	ゴマサバ	34.0	" 1738	"	34.0
" 1711	"	37.5	" 1725	"	36.0	" 1739	ホシサバ	36.5
" 1712	不明	36.0	" 1726	"	32.0	" 1740	ゴマサバ	37.5
" 1713	"	37.5	" 1727	"	37.0	" 1741	"	35.5
" 1714	ゴマサバ	35.5	" 1728	不明	36.5	" 1742	"	34.5
" 1715	"	33.5	" 1729	"	35.0	" 1743	ホシサバ	34.0
" 1716	"	35.5	" 1730	"	32.0	" 1744	ゴマサバ	35.0
" 1717	"	37.0	" 1731	ホシサバ	35.5	" 1745	ホシサバ	34.0
" 1718	"	36.5	" 1732	ゴマサバ	34.0	" 1746	ゴマサバ	36.0
" 1719	"	31.5	" 1733	"	37.0	" 1747	"	35.5
" 1720	ホシサバ	34.5	" 1734	ホシサバ	36.5	" 1748	"	37.0
" 1721	ゴマサバ	35.0	" 1735	ゴマサバ	35.5	" 1749	"	36.5
" 1722	"	35.0	" 1736	"	35.0	" 1750	"	36.0
" 1723	不明	36.5	" 1737	ホシサバ	34.0			

## 鯖魚況調査

### 済州 鯖魚場

調査の対象になった漁船は6月より9月ノ夕日迄、串木野港に水揚げした漁船延110隻である。

算出の方法は一航海中の漁場が同一である場合は総漁獲量を操業日数及び乗組員数で除し毎夜平均釣上量を求め又漁場が異なる場合は漁場毎に区分して計算した。



図示した如く結果は後衛が最も漁はよく次いで前衛、河の順となっている。最も好漁のあつた漁場は高嶽(高嶽山ノヲク7m)E30湊附近で8月30日~9月7日(旧暦7月21日~7月29日)が最も活況を呈し、1人1夜当り釣上量も11~20x 3ヶ所 21~30x 3ヶ所 31~40x 5ヶ所 41~50x 3ヶ所 51~60x 1ヶ所 71~80x 1ヶ所となっている。

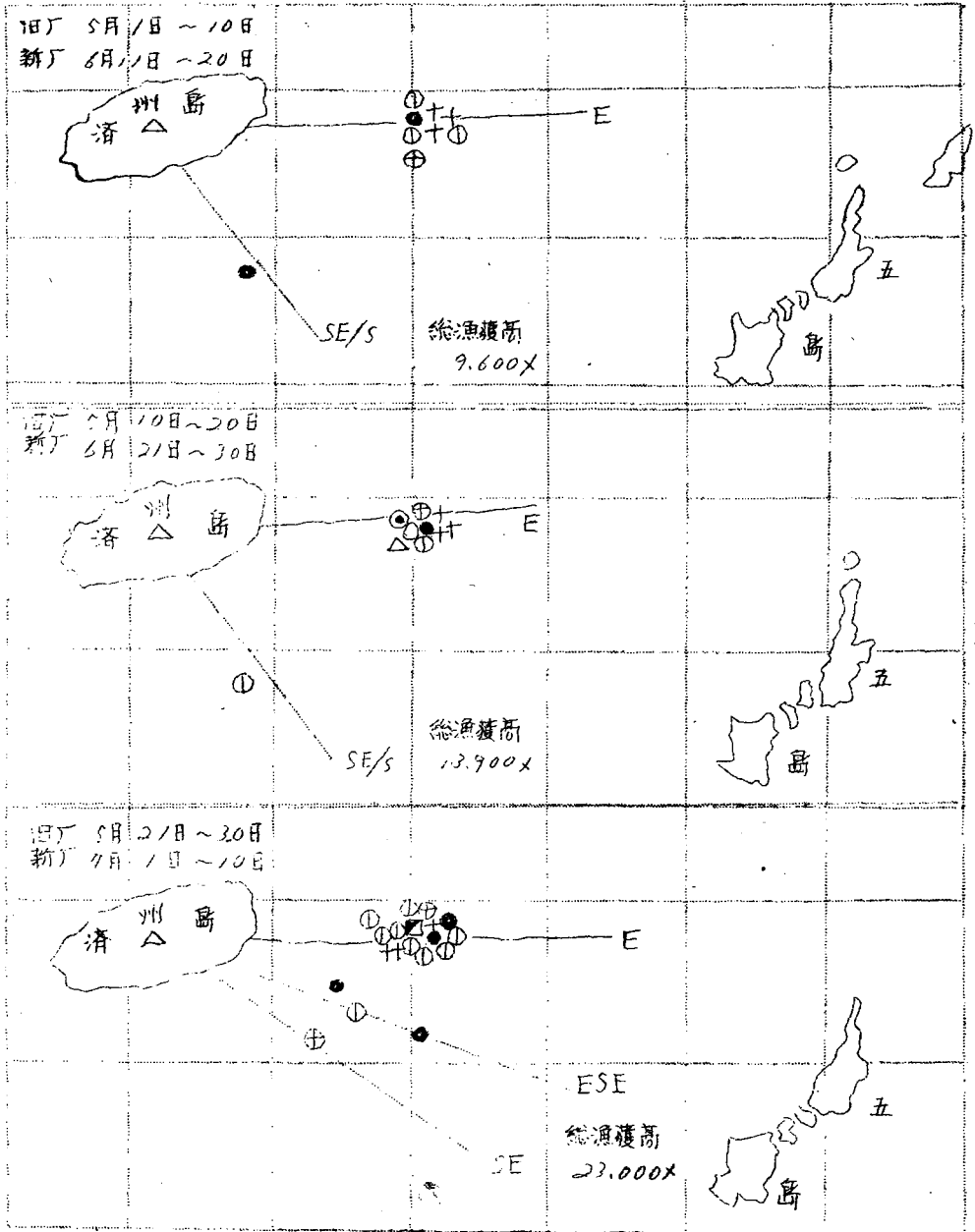
魚群の動きを見ると初漁当時の高嶽E30湊附近から7月上旬~中旬に亘りS及びEを伝わり五島大湊崎NWS0~60湊附近に現われている。

一方接岸した傾向もあり、一部濟州島に近接して操業した船で好漁をしたのもあつた。8月上旬~中旬には南部に現われ高嶽S15~20湊附近で活況を呈している。

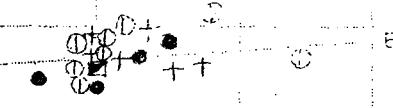
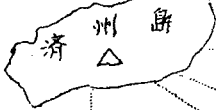
これ以後、季ライン内の操業は不可能となり、7月10日以降は本漁は終了した。

前周、月、後隔別  
 /日/人当り釣上量

- |   |        |   |        |
|---|--------|---|--------|
| ■ | 5X以下   | △ | 41~50X |
| + | 6~10X  | ⊙ | 51~60X |
| ⊖ | 11~20X | ▲ | 61~70X |
| ⊕ | 21~30X | □ | 71~80X |
| ● | 31~40X |   |        |

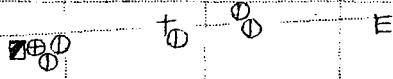
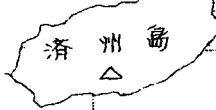


旧厂 6月1日~10日  
新厂 7月1日~20日



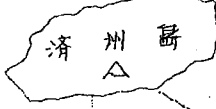
ESE  
総漁獲高  
21,240x

旧厂 6月11日~20日  
新厂 7月21日~30日



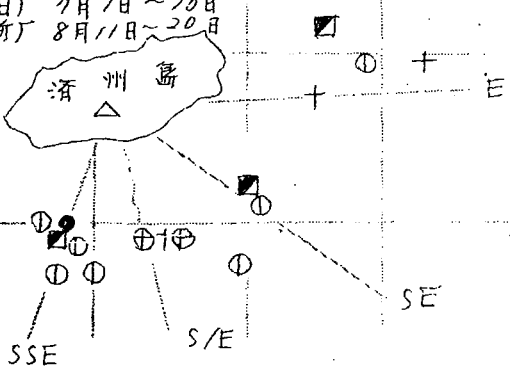
総漁獲高  
13,200x

旧厂 6月21日~30日  
新厂 8月1日~10日

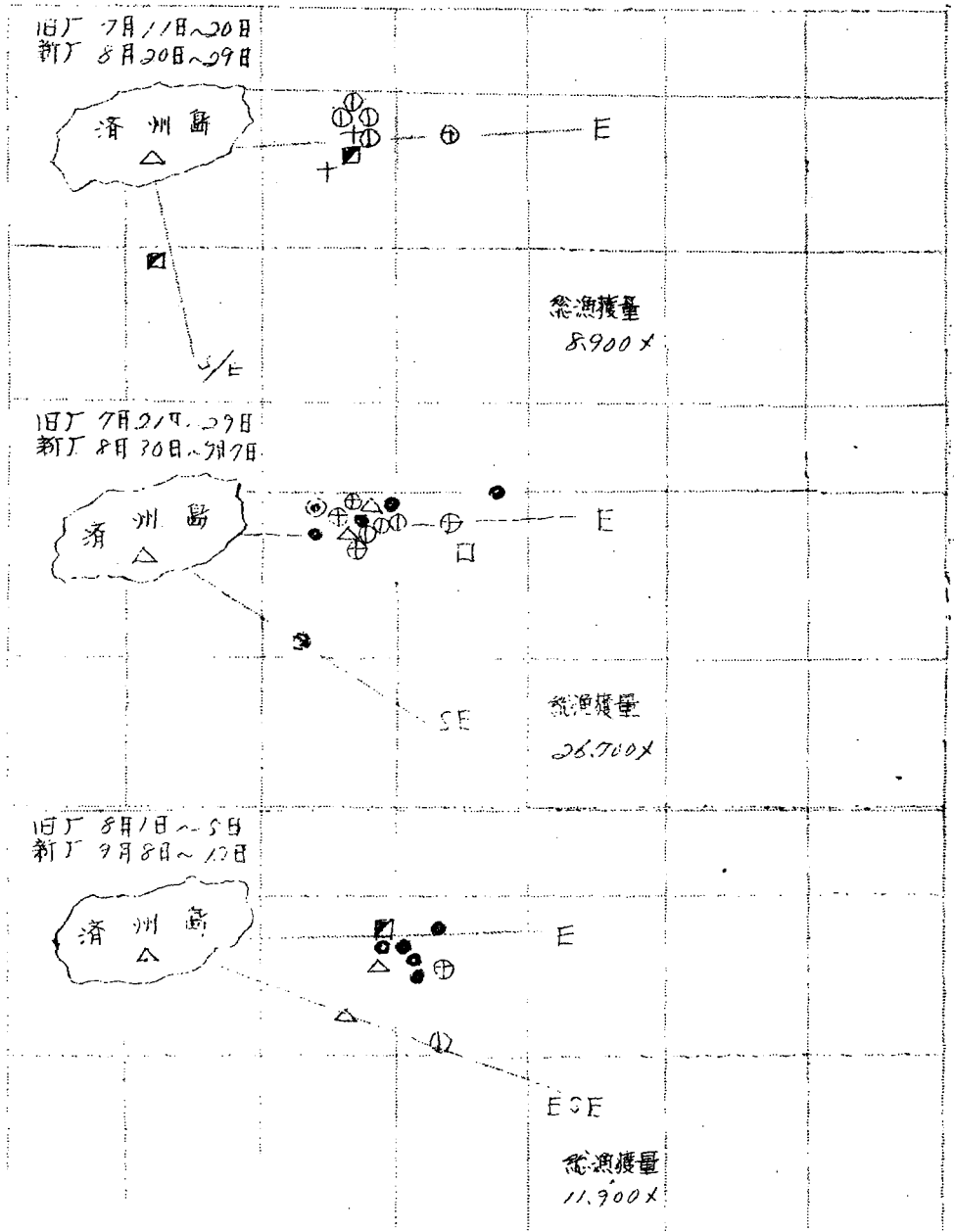


総漁獲高  
17,350x

旧厂 7月1日~10日  
新厂 8月11日~20日



総漁獲高  
17,350x



## 九州南西海域 (東支那海)

(イ) 10月上旬～11月上旬

済州島漁場の喪失に伴い昨年頃から急激に増加した鯖釣漁船の動静は今後この漁場に変る新漁場の開拓如何にかゝるものと憂慮された状態に達しておりましたが然し西から串本野港根拠のかじき延縄船が餌料にサバを沖合で釣上げて操業する慣しがあり従つてこの動静を注視していた鯖釣漁船は26年1月から鯖船の又、3共和丸の調査で漁場として操業可能なること一応裏付けされていた。

九州南西海域に10月中下旬から出漁し串本野のかじき延縄船を目標に操業し相当の成績を挙げ始め9月下旬から1ヶ月空白期間を作つただけで鯖漁の再開を見るに至つた。

この漁況も今月上旬に到り最盛期に入った様であり、当指導所も立地的に鯖漁業とは関係が深く、又今年の漁場が共和丸調査の位置より西変している点から資料不備にもかゝらず一応の経過報告として別図の如く漁場を図示してみました。

漁場は鯖釣漁船の大半が鹿児島港に水揚するため資料蒐集は思ふ如くならず、主にかじき延縄船の餌釣りの餌付きの良かった船の位置と好漁鯖釣船の代表的な船の重をとり移動図を作つた。

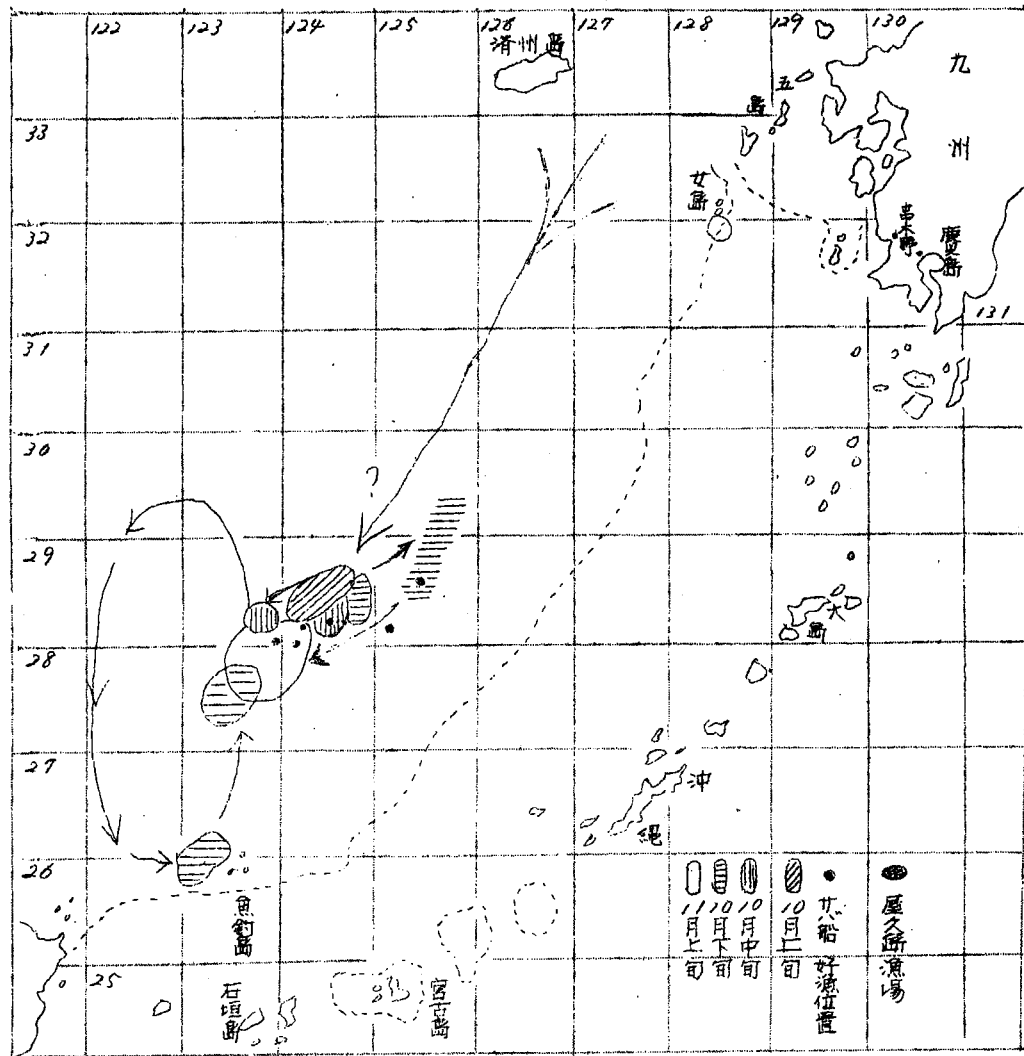
これから判断すると済州島より南下したと思われる魚群は10月上旬かじき延縄船の操業により $N28^{\circ}\sim30^{\circ}E124^{\circ}30'$ 附近に可成り見え始め9月下旬迄餌料として釣れなかつたサバが漸次活発に釣れ始めた。

この情報と共に空白期間を転業も出来ず屋久島近海で操業し僅かの漁獲しかなく不如意としていた鯖釣漁船も10月中旬からは一応その海域に出漁し始めた。漁場も $N28^{\circ}E124^{\circ}$ に移動し更に同旬終り頃にはEへ移動し $N28^{\circ}E124^{\circ}30'$ に到つた。鯖船の1隻は4日操業し3,300×の漁獲をしている。10月下旬は月も下弦となり鯖船の出漁も中旬より増え魚群を遡つて $N28^{\circ}30'E124^{\circ}45'$ から北東に上り $N29^{\circ}E125^{\circ}$ に達し最低1,000×から平均2,500×～3,000×の漁を見ている。

又同旬魚釣島沖でも延縄船が漁をしているが、この魚群は魚釣島から東支那海を循環しているものであるか否かは不明である。11月上旬に入り魚群は南西の $N28^{\circ}E124^{\circ}$ と再び南下し漁況も活発となり最高8,000×の漁獲をみている。

上旬の終りから中旬にかけて魚群は更に南下し現在 $N27^{\circ}\sim27^{\circ}30'E124^{\circ}$ 附近に到り漁況は依然として活発を極め鹿児島水揚は連日6千貫から1万貫近い数字を示した。

漁場圖



(ロ) 11月下旬～12月上旬

調査船延3隻で資料も不完全であり概況調査としかならない。

11月中旬から下旬に入り漁場はやく北東に移動し益々好漁を示し、最高8,500× 平均で5,532×を示し連日10,000×以上を鹿児島港に水揚している。各船の操業状況は30～40名の乗組で一船で2,000～3,500×釣上げており一航海の平均操業日数も3日となっており一ヶ月の航海は確実に操業している。

12月上旬に入り漁況は少し下り坂となったが依然好況を呈し平均5,445× 操業1日に1,500～3,500×の釣獲を見ている。漁場は殆んど11月下旬と変わらず、少し面へ移ったようである。水温は22～25℃と報告されている。

サバの餌付も1,000×位の時は朝夕が良く、3,000×位の際は1晩中むらなく釣上げると云う。魚体は南に下る程、小型となりN28°附近で130～150隻、N27°附近では100～130隻位となっている。

漁場	11 月 下 旬						12 月 上 旬					
	隻 数	総漁獲量	最 高 漁獲船	最 低 漁獲船	1隻平均 漁 獲	平均操業 日 数	隻 数	総漁獲量	最 高 漁獲船	最 低 漁獲船	1隻平均 漁 獲	平均操業 日 数
①	1	3,000	×	×	3,000	3	—	—	—	—	—	—
②	12	60,850	8,500	3,000	5,532	3	14	59,900	8,000	3,500	5,445	3.3
③	—	—	—	—	—	—	2	9,900	8,500	1,400	4,950	3

(イ) 12月中旬～1月上旬

調査船延4隻の資料から漁場の動き、海況と漁況の関係、更に操業区域を100平方海里に区分してその漁場の価値を判断出来ないものかと試みてみた。

◎ 漁場の動き

11月活況を呈したN28°E124°附近の漁場は12月上旬から中旬にかけて悪天候に災いされ余り良い漁と云えない操業状況であった。

12月中旬も16隻かN27°30' ~ 28°30' E 124° ~ 125°で操業している。

然し漁況は余り好い方ではなく割合好漁をみた位置はN28°E124°、W27°30'E124°30' 附近で7000x、8000x、10000xと釣獲しているが、何れも操業日数が4日~8日と延びている。

12月下旬に入り漁場はN28°線を狭んで南北に広がりを見ただけで前旬より大して変動はない。然し漁況は非常に活発となり、各出漁船の殆んどが毛当り100x即ち60毛型で1航海6,000x以上と云う満船状態まで操業出来、日数も短縮され3日から5日間と云う稼動状況は此の海域として最上に近いと云えよう。

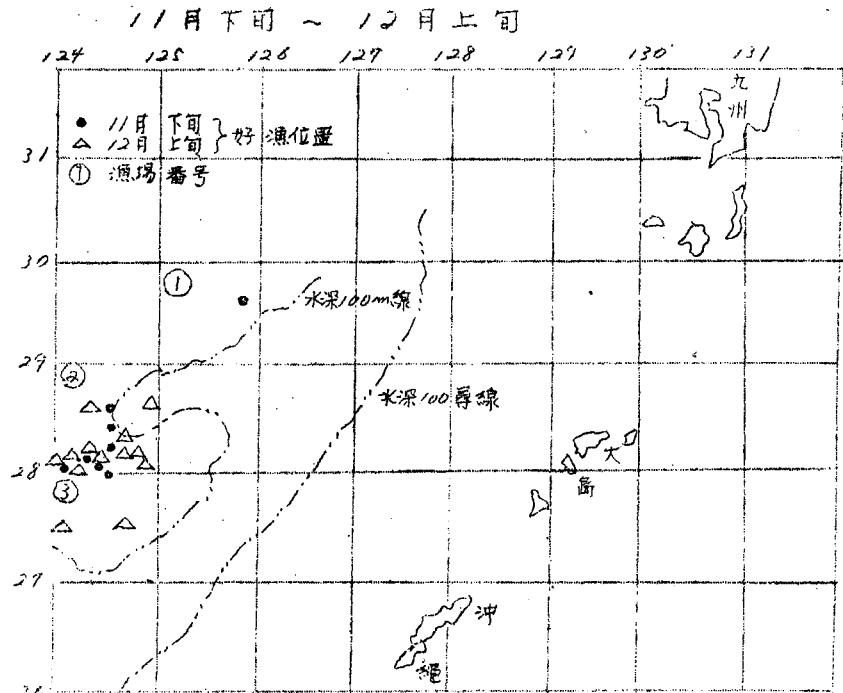
この好漁も1月に入り、一時中絶みを見せ、N28° E 124° 附近での操業は非常に困難となりこの附近で操業の各船は魚群を求めて転々ど漁場を移動して操業している。

1月3~4日頃、従来の漁場より可成り北上したN30°10' E 125°21' 附近で2隻操業し錨泊のまゝ10,000~12,000xを2日間で釣獲して好漁の口火を切り更にN29°10' E 126°20' 附近N28°30' E 124°30' ~ 50'附近は活況を呈して来た。

なほ1夜最高釣上げは12月中、下旬に釣手40人で6,000xと云うのもあり漁場はN28° E 124° 附近で1月上旬は同漁場より北上した2つの新しい漁場で釣手30人で、4,000~4,500x、40人で6,000xと云う済州島漁場に劣らない成績を挙げております。

◎ 海況と漁況との関係 (西日本海況旬報参考)

この海域の甘ハ漁場形成の適水温は12月中、下旬は水温21°C ~ 23°C 附近で好漁をみており、操業各船の資料でも





好漁時の水温は $20^{\circ}\text{C} \sim 22^{\circ}\text{C}$ となっており多少の誤差はあるものとして、大体一致しているので一応この海域に於ける12月のサバ漁獲水温とみて差えないものと思われる。

1月上旬に入り水温も全般的に低下しており、サバ好漁々場は3ヶ所に分れ $21^{\circ}\text{C}$  前後の処と $17^{\circ}\text{C}$ の処で漁獲されています。前者の方は問題ないと思われ、操業各船の資料とも大体一致していますが、后者の $17^{\circ}\text{C}$ の地点での好漁は操業船の報告によると $19 \sim 20^{\circ}\text{C}$ となつて誤差が大きいようである。

これによつて漁期始めの10月中旬から今年の1月上旬までのこの方面のサバ好漁水温は次の如くなるものと思料される。

10月	中旬	$26.0 \sim 26.5^{\circ}\text{C}$
"	下旬	$25.5 \sim 26.5^{\circ}\text{C}$
11月	上旬	$24.5 \sim 25.5^{\circ}\text{C}$
"	中旬	$24.5 \sim 26.0^{\circ}\text{C}$
"	下旬	$22.0 \sim 24.5^{\circ}\text{C}$
12月	上旬	$22.0 \sim 24.0^{\circ}\text{C}$
"	中旬	$22.0 \sim 23.5^{\circ}\text{C}$
"	下旬	$21.0 \sim 22.0^{\circ}\text{C}$
1月	上旬	$20.0 \sim 21.5^{\circ}\text{C}$

### ⑥ 漁獲率

次表の如く1人1夜当りの釣獲率と1隻平均漁獲高、モ当りの漁獲高を出してみた。

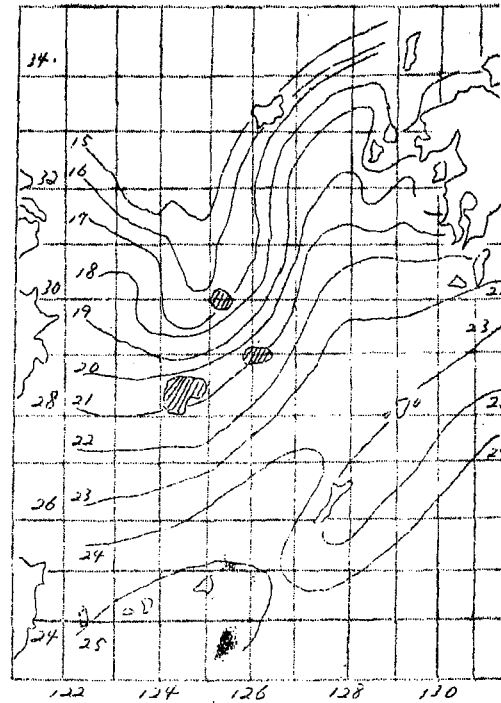
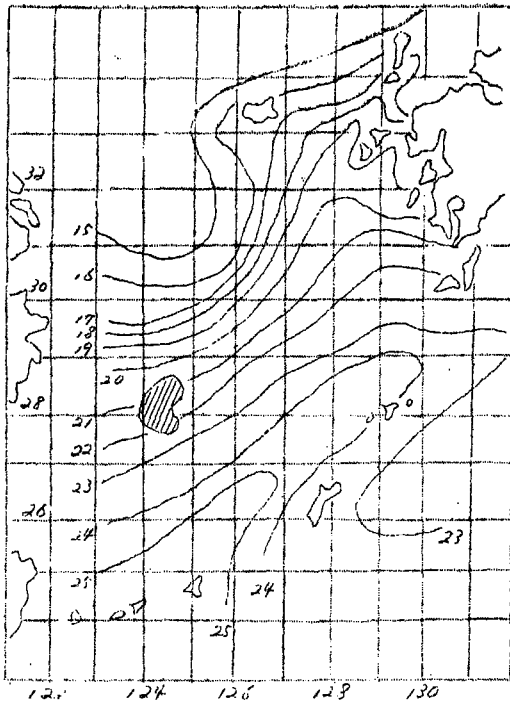
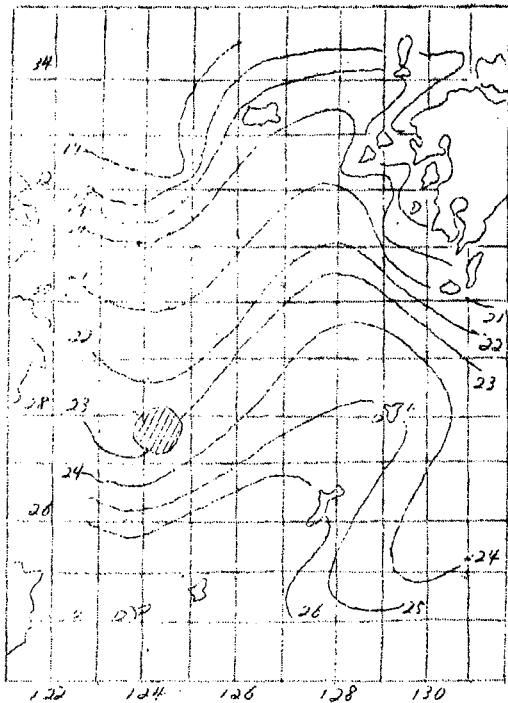
これより漁獲高の推移をみると12月中旬は1隻最高(平均)  $7500 \times$  モ当りでは1ノク6×が最高である。調査船16隻中10隻はモ当り  $100 \times$  以上の漁獲を挙げているが、操業日数の延長で1人1夜当りの釣獲は最高で  $53.5 \times$ 、不振時には  $6.7 \times$  となり、各漁場の平均をとつても  $30 \times$  と他の旬と比較して低くなつている。

12月下旬に入つて平均漁獲高は  $6933 \times$  と前旬より稍々低くなつているが、各操業漁場共特に悪い処がなかつたため平均は  $5727 \times$  と前旬の  $4906 \times$  より逆に上廻り、モ数当りの最高では  $154 \times$  と云う満船の漁船も出現し、漁場全体の総平均でも前旬を上廻る  $95.4 \times$  を示している。1人1夜当りの釣獲率も操業日数の短縮で可成り長く平均で  $7 \times$  の増加を見ている。

12月中旬

12月下旬

1月上旬



月別	漁獲	漁獲	操業隻数	人船隻数	操業人首	船隻数	1隻平均漁獲	屯当り漁数	1人1日釣獲高
十二月	イ	1,000 <sup>x</sup>	1	5	20	34	1,000	29.1	10.0
	ロ	700	1	5	21	35	700	20.0	6.7
	ハ	11,000	2	6	73	128	5,500	85.9	25.1
	ニ	2,800	1	8	29	19	2,800	35.5	12.1
	ホ	2,500	1	5	43	68	2,500	36.2	11.6
ヘ	12,000	2	3	68	120	6,000	100.0	53.5	

中 部	計	23,500	4	5	145	236	5,875	100.0	30.9
	ハ	13,700	2	4.5	64	124	6,850	110.5	47.6
	ヘ	4,000	1	3	30	34	4,000	117.6	44.4
	ニ	7,500	1	5	42	64	7,500	67.2	36.0
	ホ	—	—	—	—	—	—	—	—
計	78,500	16	78.0	535	922				
計				495	39.7	57.6	4,906	85.1	30.1
下 部	計	20,000	3	4	110	209	6,933	100.0	47.3
	ハ	28,500	4	5	150	219	5,625	121.0	37.2
	ヘ	4,000	1	3	24	65	4,000	61.5	55.5
	ニ	6,000	1	4	34	39	6,000	154.0	44.1
	ホ	2,500	1	4	34	53	2,500	47.1	19.4
	ロ	4,000	1	4	44	75	4,000	53.5	22.7
計	63,000	11	47	396	680				
平均				4.2	24.7	60	5727.2	95.4	37.0
一 月 上 部	ア	5,500	1	3	30	48	5,500	64.6	61.1
	イ	12,000	3	4	102	136	5,666	125.0	41.1
	ウ	22,500	4	5	143	225	5,625	100.0	30.0
	エ	28,000	3	3.5	120	217	9,330	129.0	100.0
	オ	4,000	1	4	30	40	4,000	100.0	33.3
	カ	12,400	2	4.5	68	111	1,200	112.8	40.5
	キ	8,500	1	2	44	72	8,500	118.1	96.6
	ク	8,500	1	4	43	68	8,500	125.0	49.4
計	106,400	16	65	580	917				
平均				4	36.2	57.3	6,650	116.0	45.1

1月上旬は当初一時漁が下火で停滞状況に至ったが、3日頃より持ち直し漁場がき。では一隻平均、9,330xと今迄に見られない豊漁を見、操業全漁場とも当日100xを超過し、1人1舟当り釣獲高も100xとまう数字が現われている。

漁場平均でも前旬より増加しているがこれは操業日数の短縮と漁獲量の多かつたことによるもので1人1舟当りの漁獲も当初操業した漁場より。わ。の30x程度が最低であった。

◎ 漁場選定条件

(a) 潮目と水深100m線を求める。

従つて当然漁場は100m線より西の東支那海に形成される。

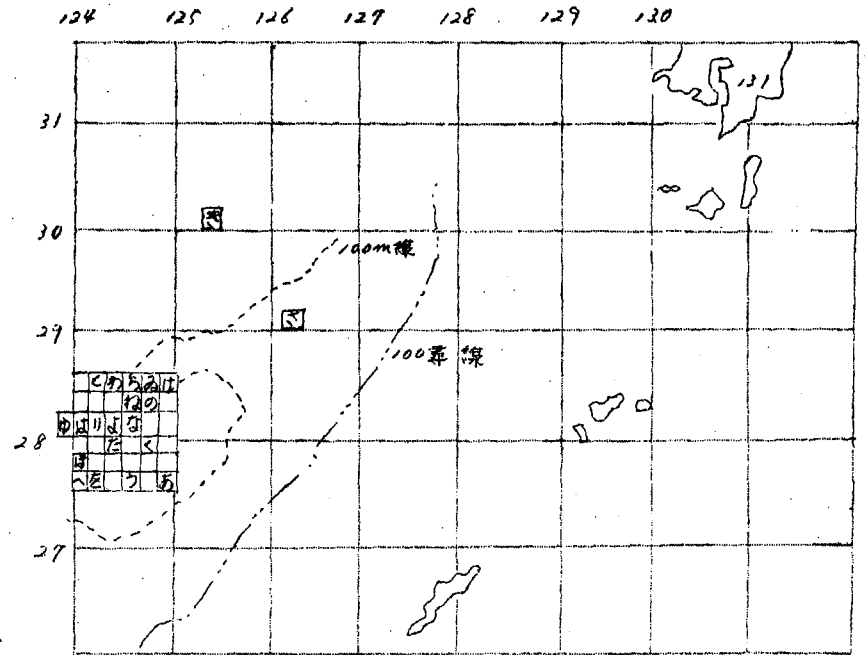
(b) 水色を見て清澄及び濁濁を避けてその中間の半濁海域を求める。

(c) 操業を開始し集魚するには、点灯してサバが少しでも釣獲されたら、余り大きく漁場を移動せず、小刻みに移動する。これは最後にはサバを蟻集させることになる。

(二) 1月中旬 - 2月中旬

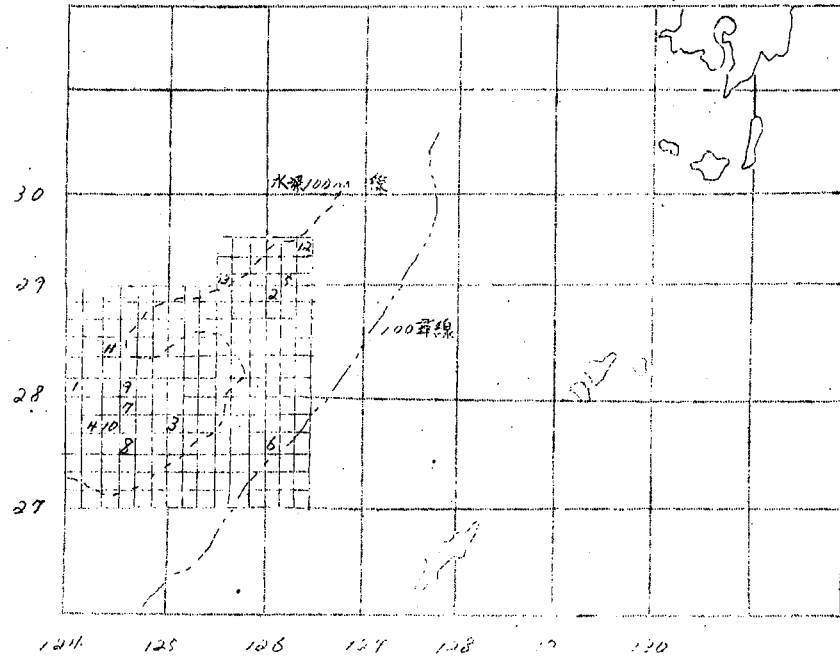
1月上旬迄に非常に活況を呈した此の海域のサバ漁況も下旬に入り漸く下火となり、2月中旬以降は出漁中止の状況になった。

次第によつて判明する如く下旬に至つて急激に不振となつて来ている。



旬別	漁場番号	総漁獲量	操業隻数	1航路操業日数	操業人箇	総屯数	1隻平均漁獲量	屯数当り漁獲	1人1日当り漁獲
一 月 中 旬	1	7,000x	1	4	43	18	7,000	89.7	40.7
	2	5,000	1	3	42	40	5,000	125.0	39.6
	3	13,800	2	4	69	148	6,900	93.2	51.3
	4	4,200	1	4	38	66	4,200	63.6	27.6
	5	4,500	1	3	35	71	4,500	63.4	42.8
	6	4,000	1	4	39	46	4,000	86.9	34.5
	7	8,500	1	3	46	72	8,500	118.0	61.6
	8	11,500	2	4	69	102	5,750	112.7	41.7
	9	5,000	1	4	36	63	5,000	79.3	34.7
	11	8,500	1	6	40	61	8,500	139.4	35.4
	計	72,000	12			447	747		
旬平均				4	37.3	62.2	6,000	51.6	41.1
一 月 下 旬	11	5,000	2	5	76	116	2,500	65.8	13.5
	9	7,800	3	5.3	112	167	2,600	46.7	12.9
	4	1,200	1	5	29	46	1,200	26.1	9.3
計	14,000	6		6	217	229			
旬平均				4.4	36.1	55	2,333	42.6	12.4
2月上旬	12	200	1	2	38	68	200	2.9	2.8
2月中旬	13	1,800	1	5	42	51	1,800	27.5	11.3

屯当り漁獲量も上旬の平均1/6×に対し中旬は79.3×となっている。1月中旬の主な漁区はN27°30'～28°30' E124°～125°附近)であり60海里平方の海域に各船は集中して操業している。好漁船は1航海に6,000x～8,500xを漁獲しており50～70屯の漁船としては満船状態といえます。



下旬になり不漁が続けたため出漁船は激減し従つて水揚量も低下している。

2月に入り更に漁況は悪化し漁場によつては1人/日当りの釣獲量2.8×というのもあり、以後3月迄此の漁場での操業は終値した。

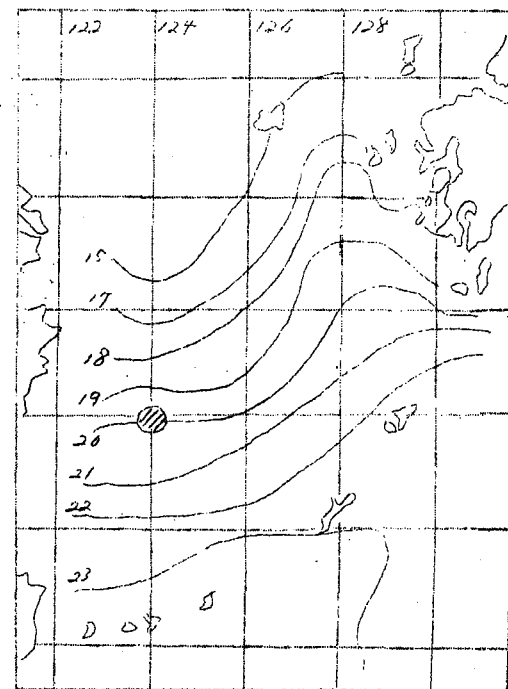
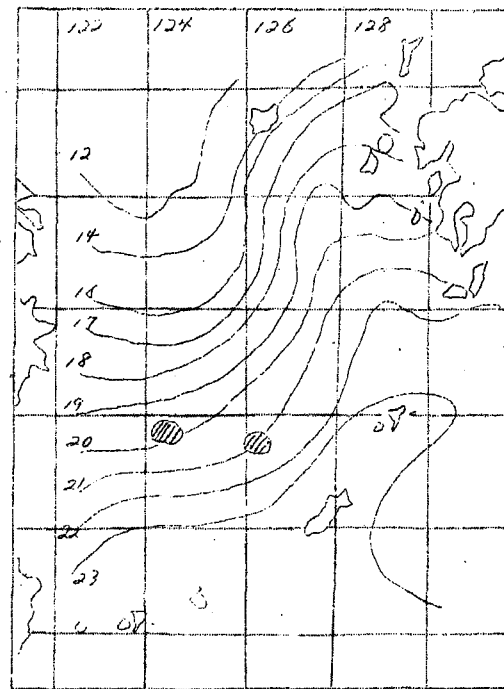
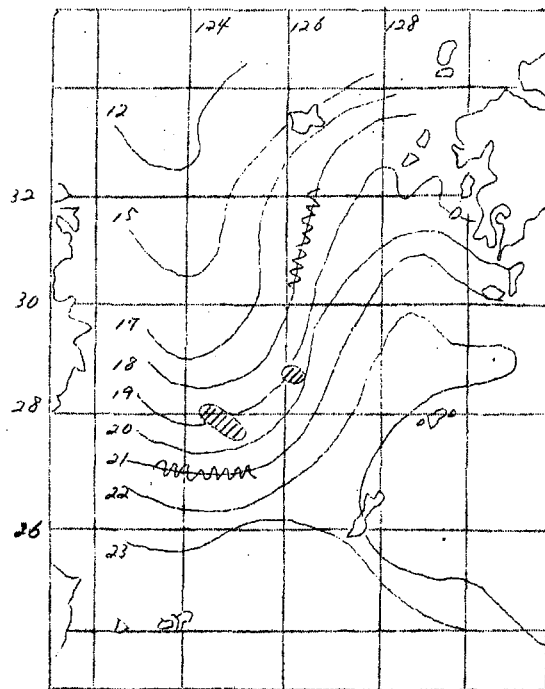
海況(水温)についてみると別図の如くで漁場は1月中、下旬とも略19~20°Cの水帯に形成されている。2月上旬には1°C内外の低下で着しい変化はないが、中旬には3°C内外低くなり17°~17.5°Cを示している。

これからみても水温の変化が漁況に或る程度影響しているものと思われる。

1 月 中 旬

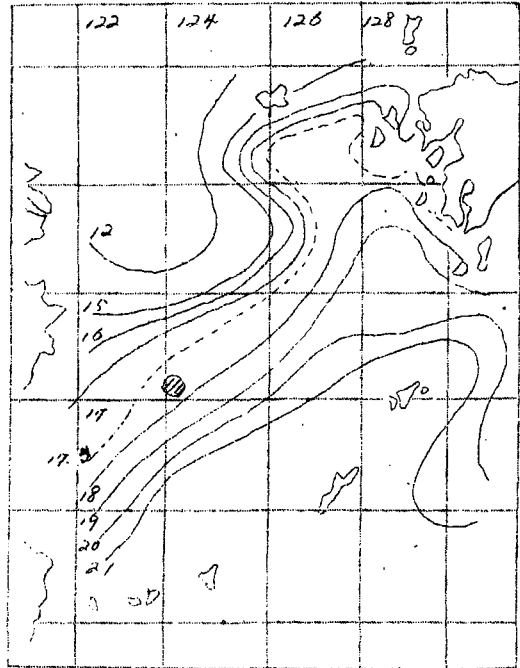
1 月 下 旬

2 月 上 旬



( 好 漁 マ 場 )

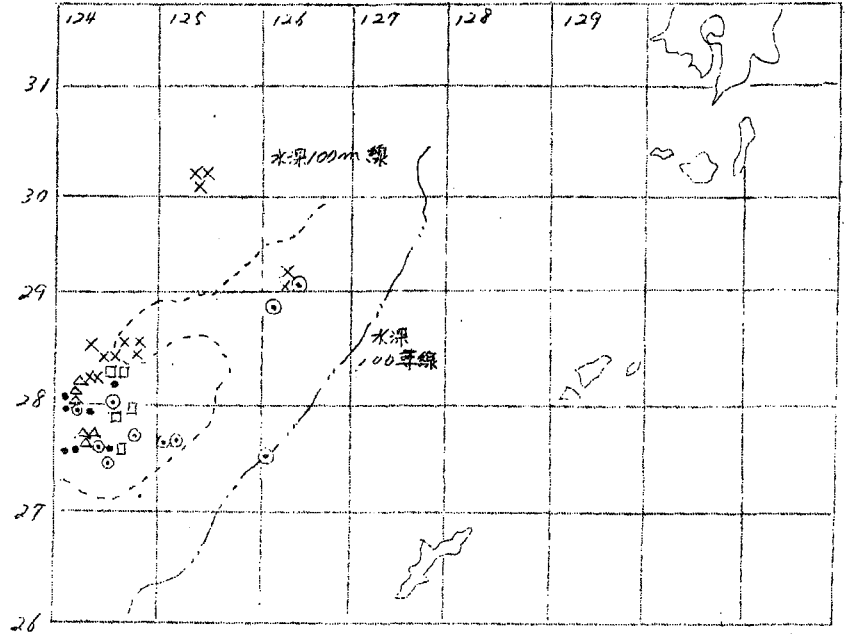
2 月 中 旬



- 12月中旬
- △ " 下旬
- × 1月上旬
- ⊙ 1月中旬
- " 下旬

何れも1航海5,000×以上  
 毎当り100×以上のもの

何れも1航海2,000×以上  
 漁のあつたもの





# 鱸 刺 網 漁 業 試 験

山下知昭、岩倉 栄、篠原耕治

(一) 趣 旨 当所開設以来の継続事業であるが近年稀に見る不漁が続き本県漁船による刺網漁業に於いても種々打開策が講ぜられ、遠く五島灘へ出漁するとか或は他県へ入漁するなどとつた苦しい操業状況であつた。しかし一部の小型船は他県へ入漁し他大型船に伍して操業するには規模小さくそのための根據地を野母、天草方面に移して操業するのもあつた。此れ等の漁船凡そ150隻にとつて南下群の動靜を知ることは必須條件であり当初としては前年度に引続き、天草郡崎津港を根據地として出漁し漁況及漁況の調査を行い漁況放送、漁況速報により業者船の便に供して来た。

(二) 操業期間 昭和27年12月15日～28年3月5日

(三) 使用船 指導船 ちどり丸 19.57 Ton 50 HP  
NEC 103型 魚群探知機 25W 無線電信機装備

(四) 従業人員 調査員 1名 船員 10～11名

(五) 漁 獲 高

(六) 漁 具 初年度より使用のものを一部補修して用いた。

(七) 経 過

漁獲量 kg	月 日	天 候	気 温	気 圧	月 令	雲 量	向 風	波 高	うねり	透 明 度	水 色	潮 流	水 温 垂 直 分 布						操業時刻	指導船 水揚高	記 事	
													0m	10	25	50	75	100				150
1	12 28		14.8°C	1020	12.7	10	3	2	1	17	4	SE	20.7	21.64	21.39	21.01	19.80	18.49	—	18-45	せだかつを	民間船に先かけて天草西に出漁するも水温高く漁期に遅いものと思はる。
2	" 15		13.2	1030	10.0	9	4	1	0	—	3	NNW 急	15.1	—	18.14	18.60	—	17.15	—	17-40 19-15	うめいわし せだかつを	天草西出漁、依然として漁なく水温もやや高し。

3	1 17	0	18.2	1022	12.0	10	NNE	2	0	21	3	S	18.8	-	-	-	80m	18-15 19-20	なし	天草沖100等線附近を調査するも魚群見え ず、漁皆無	
4	1 27	0	8.7	1022	22.0	10	NNW	3	1	-	4	-	15.2	-	18.91	19.52	-	-	投網 せず	天草沖操業、海水汚濁甚し。時化、前に比 べ水温2°位低目となる。	
5	1 30	0	11.4	1024	25.0	8	NNW	3	1	-	4	NW	16.9	-	17.90	17.72	-	17.22 19.00	なし	水温は完全に16°台を示す。漁獲なきも野母西 20哩附近で刺網により420×及240×の 漁あり。	
6	2 1	b	8.7	1025	27.0	0	W	2	0	-	-	E	15.7	16.01	-	16.57	20m	18-05 20-20	大羽いれ 115×000	野母崎SW10哩にて操業115×の漁あり。又一 隻野母W20哩で一隻獲の漁あつた船あり	
7	2 9	b	8.8	1031	5.5	1	N	1	0	-	-	E	16.4	16.79	16.61	16.23	-	15.72	18-05 20-00	" 8×000	2月2日一隻野母W9哩にて1200×の漁あり。本 日も100~300×の船5隻あり。今の処魚群は野 母沖以南にはないよう。
8	2 10	b	17.4	1029	6.5	1	S	0	0	23	4	W	16.6	16.32	16.26	16.32	-	15.23	18-10 20-05	" 1200	北せぬより天草沖にかけて調査するも群見え ず。天草沖に大羽マイワシの来遊はないよう。今般最南野 母崎WN15哩にて520×。
9	2 20	K	13.4	1026	16.5	8	NNW	2	0	-	-	NNW	15.6	-	15.90	15.91	15.83	-	17-50 20-00	なし	片断〜野母沖に凡そ1隻出漁は引、何れも漁なし。 漁期約1週で本県近海への南下はないものと思 われる。
10	2 22	b	12.6	1026	18.5	2	N	1	0	-	4	N	15.1	-	15.27	15.20	-	15.22	17-55 20-00	大羽いれ 500	野母沖にて漁群、操業に記録されるも漁なし。 業者船は般に出漁を中止したものが多し。

(イ) 漁況概況

連年の通記さのため北薩各地の漁船は従身の操業方法を変え果外出漁、或は根據地移動などの打開策を講じている。しかし  
これにもかゝりず、漁場の北遷は一部残留する船にとっては不利で甚しい不漁に終つて終つた。

此の様な不漁は海況が割合順調であつた列から判断して不漁の原因はむしろ大羽マイワシのものにあるものと考えられる  
（全年度の西日本各地に於ける大羽マイワシの動きを見よ）又の如くなる（ヤニ図参照）

即ち、山口県刺網に於いては28年2月3日前年より一週間おくれで初漁があり、概況漁況は活港となつて来ている。一方対馬東中の揚繰網にも2月27日初漁があつたが、此の海域でも前年は2月上旬沖ノ島附近に初漁があり中旬には沖ノ島～対馬附近の日ノ籠平均800メ、下籠1100メとなつてゐる。

今年の場合対馬沖では2月下旬ヤ一群が現はれてから1月上旬には又2群が現はれ此の群は中旬末には五島灘中央部に達しているが、その後、後続群なく操業船の殆んどがス漁を喫している。五島灘に於いても漁況は極めて不振で漁期も昨年と比べて又2ヶ月遅れている。一般に魚群は遡泳戸が比較的深く稀薄で火付悪く又、ウルメ、アジの混獲多く大羽マイワシは盛漁期中でも90%内外に過ぎず、例年に見られない現象を呈している。

そのためウルメ、アジ、サバ、の豊不漁が漁況を支配しているという恰好であつた。又北さね(甌島北方)に於いても殆んど漁船の集中したことがなく、3月上旬アジサバ混りのものが獲れているだけである。

五島灘でも好漁する船もあつたが獲りて集中した漁場は形成されず、又出漁船中有漁船はその割合程度という特異な現象を示している。

次に鹿児島県刺網船の操業状況を見ると漁場の遠隔、漁期のおくれた事、等のため中、小型の船は当然淘汰されるという結果となり、一部持動性のある船が極く短期間出漁しただけである。しかし根據地を北へ移して経費節減に努めているが出漁必ずしも有漁でなく、又漁があつても100メ以下では出漁経費にも足りない状況であつた。

(1) 漁 期、 従来鹿児島県近海に於ける刺網漁期といへば2月中旬～3月下旬が常識であつたが近年著しく遅れる様になつた。今年1月30日野母崎西ノ2湊附近で420メ及240メの初漁があり、各船一斉に出漁する様になつたが、その後漁況は好転せず魚群の南下もなかつた様で2月20日頃には既に大羽マイワシは姿を消し刺網船は2月一杯で操業を打ち切つてゐる。

前年度別に初漁より終漁期迄の期間を示すと又Ⅱ図の如くなる。しかし28年以前は鹿児島県船は野母西へは出漁してゐらず、此の比較は妥当ではなく、天草以南の漁場を対杯とすれば、29年度は漁期として取扱うべきものでないが、一応示して見た。

(2) 漁 場、 漁場といつても野母西沖のみで厳密に云へば、鹿児島県近海の刺網漁場というべきでなく、鹿児島県刺網船による操業漁場というべきであらう。

図示すれば、又Ⅱ図の如くなり野母崎附近から野母崎西30湊附近に限られており移動はなかつた。巾着船の操業状況から見ても大体北緯32°～20'以南には大きな群の南下はなかつたものと考えられる。

尚、年度別刺網漁場を図示すれば、又右図の如くなる。

(3) 漁獲 漁期、漁場から不漁は当然であり、今年の場合、延ノノ隻、アタロメに過ぎず27年の68才× 28年のノ3才×に比較すると皆無に等しい。尚、本年度漁獲状況及年度別水揚状況は別図の如くである、又特殊な例として2月6日野母崎W8運附近でノノメの漁をした船があつたが珍しいことであつた。

(4) 海況 主に水温について述べて見る。

五島灘天草西沖に於いて過去、23年と比べて大差はなくノ20°高目であつた。1月中旬、指導船ちどり丸の調査によれば天草西沖ではノ9°台で昨年同期より2-3°高くなつており大羽マイワシ遡上には程遠い値を示していた。

此の期間の五島灘の水温分布状態も例年より高くノ7°~ノ8°5となつている。ノ月下旬に至り天草西沖ではノ7°に低下し五島灘中央部でもノ7°台となり大羽マイワシの遡上を見る様になつた。

総括的に水温は例年よりノ2°高目ではあつたが、異常という程ではなく漁況に大きく影響したものとは考えられず不漁の原因はむしろ他の要因にあると思われる。

(九) 普及

(1) 刺網漁況速報

初年度より実施しているもので漁期中指導船出漁毎及び通報の必要があると認められる情報を入力した場合、海況、漁況、一般漁況を取入れ関係漁協業者、その他の研究機関に送附した。

(2) 漁況放送

前年度に引き続き今年度も実施したが実施要領は次の通りである。

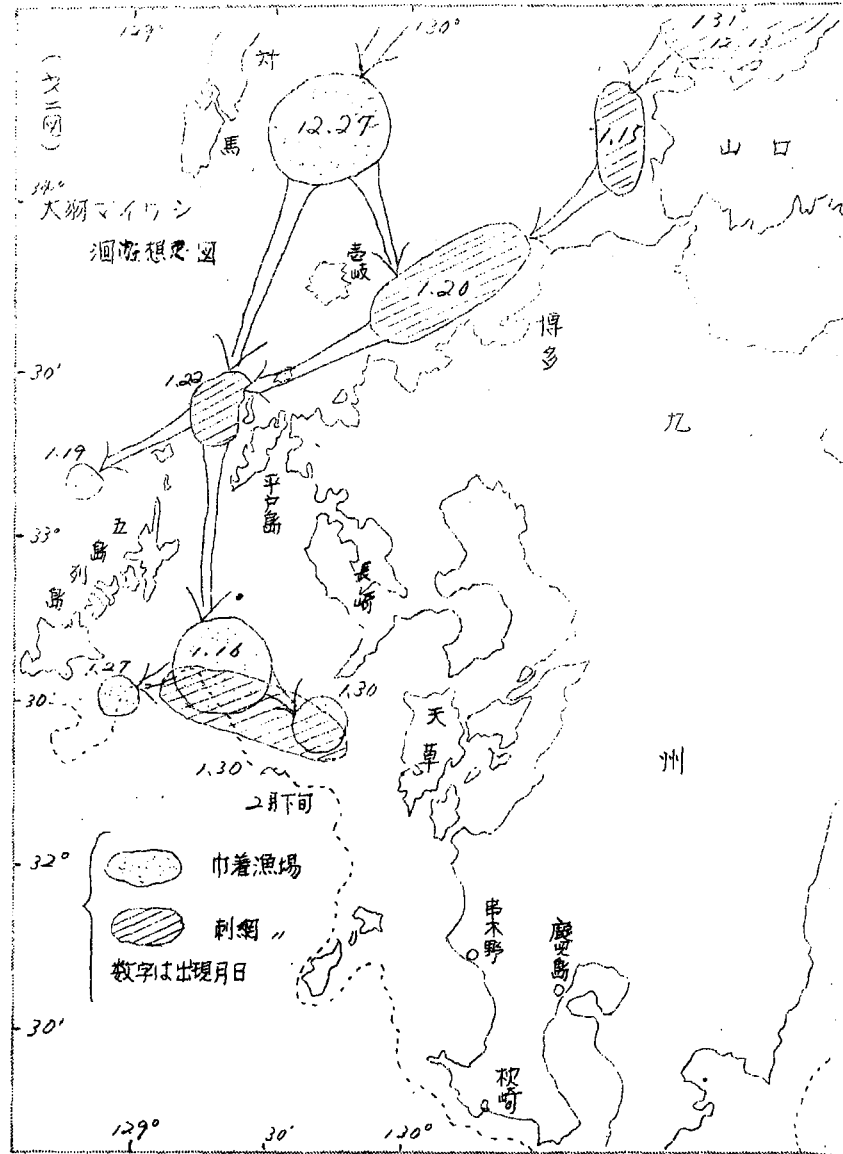
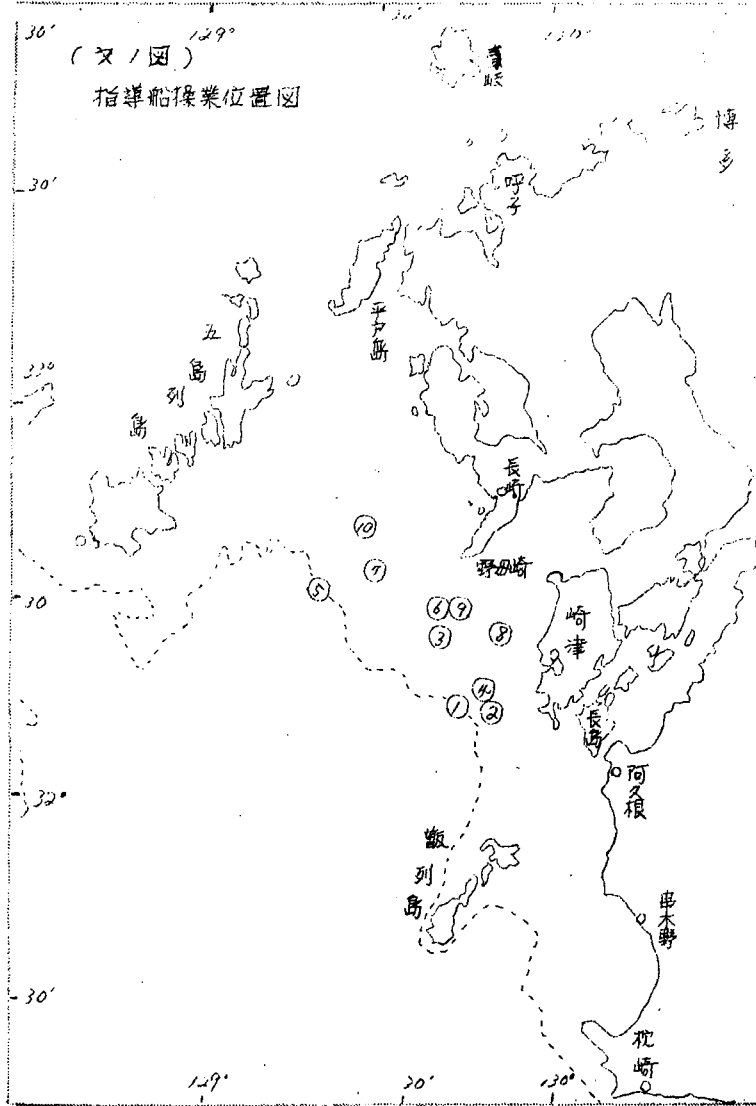
(i) 期間 昭和28年ノ2月25日~29年2月24日

(ii) 方法 当初にて作製の原稿をNHK鹿児島放送局より放送を運じ毎日09時35分より09時40分の間に放送を行った。

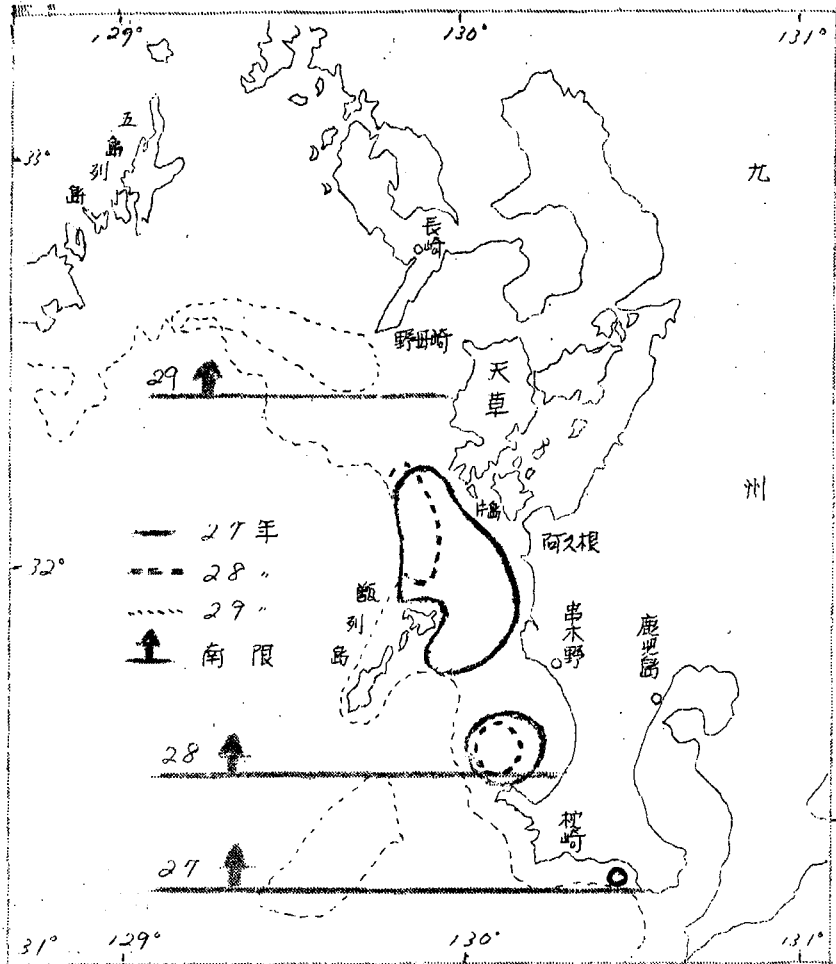
(iii) 内容 刺網及巾着網について各半漁協に電話連絡し漁況を聴取(串本野入港船については直接聴取)し漁場概況各船の出漁状況、海況、若別水揚量、魚価を調査、更に刺網の場合は指導船の操業結果をも加味して原稿作製の資料にした。

(3) 結果

前三年に比し今年度は魚群の南下が順調でなかつたため直接業者船に対する指導の効果は少なかつた。即ち業者船は速報或は漁況放送により漁況を判断しながら他漁業に専念し、南下の報を聞いて刺網に出漁したという風に消極的な効果しかなかつた。



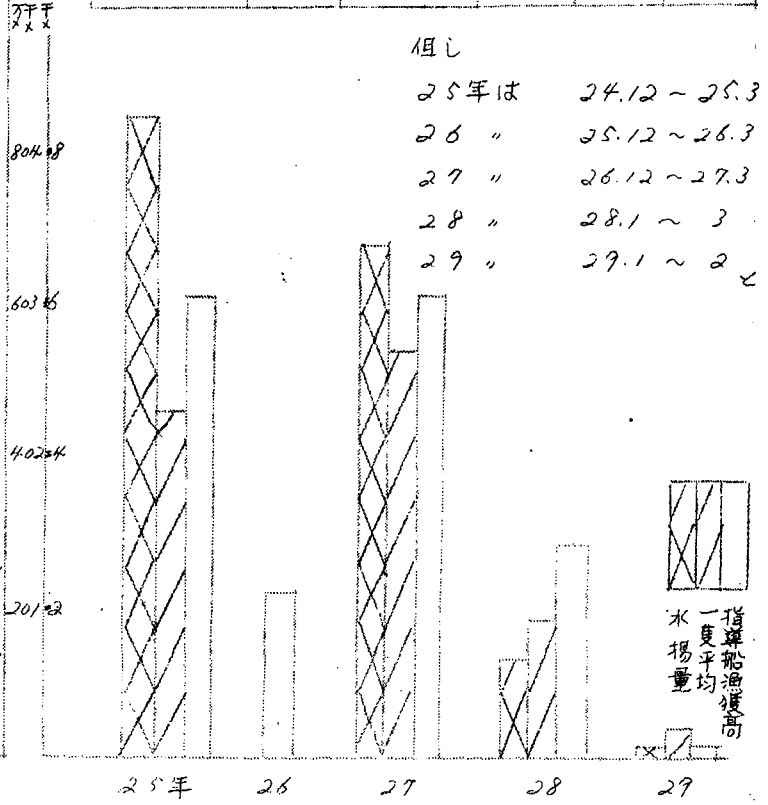
(表Ⅲ図) 年度別漁場及刺網による漁獲南限



(表Ⅳ図)

鹿児島県に於ける刺網による年度別水揚量

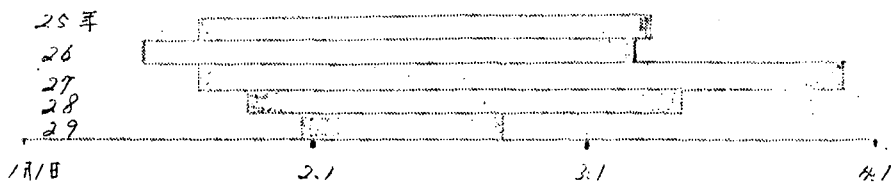
	25年	26	27	28	29
水揚量	846,844 <sup>x</sup>	ルズ船瓦に より資料 流	680,000 <sup>x</sup>	24,620 <sup>x</sup>	7,400 <sup>x</sup>
一隻平均	2,270		2,709	911	160
指導船漁獲高	6,135	1,121 <sup>x</sup>	6,129	2,987	123



値し  
 25年は 24.12 ~ 25.3  
 26 " 25.12 ~ 26.3  
 27 " 26.12 ~ 27.3  
 28 " 28.1 ~ 3  
 29 " 29.1 ~ 2

### 漁期比較

25年度 (24.12~25.3)	1月19日 ~ 3月6日
26 " (25.12~26.3)	1.13 ~ 3.5
27 " (26.12~27.3)	1.19 ~ 3.27
28 " (28.1 ~ 28.3)	1.24 ~ 3.10
29 " (29.1 ~ 29.3)	1.30 ~ 2.20



### 漁獲状況 (29年1月~2月)

月日	出漁隻数	漁場	漁獲状況
1月30日	3隻	野母崎W12'	420x 1隻 240x 1 "
2.1	5 "	" 20'	240x 1 " 100x 2 "
7	1 "	" 8'	1170x 1 "
8	15	" 10~25'	全然なし
9	25	野母崎	300x 1 "
		W~S	210x 2 "
		10~20'	200x 1 " 100x 1 "
			他はなし
10	28	野母崎	520x 1 "
		W10~25'	320x 1 " 100x 4 "
			20~80x 3 "
			他はなし
12	1	野母西沖	130x 1
13	15	"	計1550x
19	1	片島西沖	なし
20	15	片島西~野母SW	なし